

高2で政治学を志し、研究者の道に至るまで

「明日できることはきょうしない」をモットーにオリジナルなスタイルを貫く

→1989年8月27日～9月10日、南部ドイツ語圏(西ドイツ、オーストリア、リヒテンシュタイン、スイス)を旅する。この一人旅の目的は、陸続きの国境を体験すること、リヒテンシュタインの11の自治体全てを歩いてみる。



→高校～大学時代は写真研究部に所属。写真のアルバイトをしていたことも。



↑大学時代の代表作の一つ「湘南小春日」。
→信州・上高地の大正池にて趣味の写真撮影の様子。



→2004年5月、大学時代に暮らした横浜市内のアパートを約四半世紀ぶりに訪れてみた。



→2003年1月、国際会議で訪れたスイス・ジュネーブのILO(国際労働機構)本部にて。長くILO理事を務めた丸山康雄氏(故人)が退職記念に植えた桜の木を背景に。



→2003年10月、フランスにおける救急医療体制等の調査のためSAMU(緊急医療サービス)を訪問。



→2004年1月、自宅で大学院ゼミの新年会を開催。



↑2003年9月、ゼミの夏合宿で男子学生たちと裸の付き合いの様子。ゼミ生たちと。



興味津々……

法学部教授 宮崎伸光



◆政治学を専攻された理由は？
——父親が参議院の職員だったこともあって、物心ついた頃から、家では、ごく自然に政治が話題になっていました。父と一緒に、ニュースや日曜日の朝にNHKで放送されている国会討論会などを見て、私が意見を言うと、父が「それは違う」とか、「こういう見方もある」ときちんと話してくれるような環境だったんです。ですから、高校二年の頃から、大学で政治学を勉強したいと考えていました。

——浪後、当時、日本一学費が安かった横浜市立大に入学しましたが、実は、入ってから政治学専攻の先生が一人しかいないことを知りました。ただ、師事した今井清一

先生は、戦間期(第一次世界大戦と第二次世界大戦の間)を中心とした日本政治史が専門でしたが、同時に都市の問題も熱心に研究されていたことが幸いでした。そこで私は、次第に、都市の拡大によって近郊の地域社会の政治的あり方がどう変化するのか、というテーマに関心を持つようになったんです。すると、横浜という場所が素晴らしいフィールドであるということが分かり、ここで興味のあるテーマを勉強していこうと決めました。

◆研究者の道を選ばれたのは？
——大学時代はかなり自由に遊び呆けていたものの、卒業に必要な単位は三年生のうちに取り終えていたし、教員が研究者にな

りたいと考えていたので、教職も取りました。でも、指導を受けたいと願っていた横山桂次先生がいらした中央大の大学院には合格できませんでした。それで、横浜市立大の文理学部文科を卒業後、同理科三年に学士入学して、都市問題を研究する際の意識調査などで必要と考えた統計数学を専攻しながら、大学院を目指すことにしました。

結局、三度目の挑戦で、何とか中央大の大学院に合格。高校の非常勤講師をしながら、研究者への道に向かいました。幸い、一九八八年には先輩の紹介で地方自治総合研究所の常任研究員の職を得ることができ、十三年半勤めた後、二〇〇二年に本学法学部教授に着任しました。

◆どんな研究をされているのですか？
——自治体レベルの行政や政治への関心を中心にあつて、「公共政策課題の解決装置としての自治体とまちづくりのあり方」を考究しているといったところでしょうか。自治行政制度、自治体政策など、いくつかの研究テーマを持っていますが、特に、自治体議会と消防行政というテーマは、専門的研究者が極めて少ない分野だけに、精力的に取り組んでいきたいと思っています。また、地域社会のあり方―都市近郊における

◎(みやざき・のぶみつ)
1957年東京生まれ。1980年横浜市立大学文理学部文科社会課程A(政治学)卒業後、同理科数学課程(統計数学)に学び、1982年中央大学大学院法学研究科博士前期課程政治学専攻入学。1986年同修了。高校の非常勤講師を経て、1988年財団法人地方総合研究所常任研究員(2年間の財団法人連合総合生活開発研究所派遣を含み13年6カ月勤務)。2002年4月本学法学部教授に着任。専攻は自治行政論、地域政治論。自治行政制度、消防行政、自治体議会、自治体政策を研究テーマとする。

地域権力構造が都市の拡大に伴ってどのように変容するのかについても、大学時代からずっと関心を持ち続けています。

◆法政着任後三年目の心境は？
——現在、学部生と大学院生の授業とゼミを担当していますが、特に政治学は教員の層が厚く、さまざまな領域の専門家の先生がいらつしやる点で、教育・研究の両面で、とても恵まれた環境にあると感じています。

また、法政は立地の良さから社会人学生を集めやすいし、付属校や指定校、留学生などの多様な入り口もあります。必ずしも全ての学生が第一志望で入学したわけではないでしょうが、さまざまな学生が混じりあえることは素晴らしいメリットであり、いろいろな人間と出会い、触れ合うことによって、大きな成長のチャンスも生まれます。私自身、受験は大嫌いで、実際に落ちまくってききましたが、「明日できることはきょうしない」を座右の銘に、今すべきことにこだわり続けて、ここに至っています。だからこそ、学生たちには、法の自由な雰囲気の中で、学生の特権である自由な時間を活用して、早く自分自身の優位性を発見してほしい。そして、それを最大限に生かしてほしいと願っています。